

アサヒビール

アサヒビール大山崎山荘美術館で「バーナード・リーチのうつつわに跳ねる動物たち」展開催
 《白化粧彫絵飛燕文皿》など約80点を紹介

アサヒビール大山崎山荘美術館では、今年6月8日から9月1日まで「バーナード・リーチのうつつわに跳ねる動物たち」を開催している。

逸なドローイングやエッチングを多数残している。1911年に日本の地で偶然に体験した楽焼の絵付のおもしろさに心を奪われ、リーチは陶芸家としての道を歩み始め、富本憲吉とともに六世尾形乾山のもとでやきものの技術を学

び、やがてうつつわにその画才を存分にふるうことになる。リーチは初代乾山の詩的な陶画にみられる雅味に富む調和へのあこがれから、うつつわにおける絵画表現を追求。また、自然を深く愛し、周囲の情景



バーナード・リーチ《白化粧彫絵飛燕文皿》(1954年、陶器)



バーナード・リーチ《スリップウェア グリフィン図大皿》(1952年、陶器)



バーナード・リーチ《白化粧鉄絵駟兔文大鉢》(1935年、陶器)



バーナード・リーチ《ガレナ釉彫絵蛙図大皿》(1953年、陶器)

を常に観察しスケッチしていた一方で、東西の古作の研究にも熱心に取り組んでいる。リーチの作品には鳥、うさぎ、蛙から空想上の動物グリフィンまで、じつにさまざまないきものが、彫絵、色絵、掻落など様々な技法でうつつわに描かれ、なかでも動物は多様なバリエーションが生みだされている。

同展では、リーチが陶芸家として歩み始めた初期の頃から晩年にいたるまで、生涯を通じてそのうつつわに登場したユニークで愛嬌のある動物たちに焦点をあて、約80点を紹介している。主な展示作品は

《白化粧彫絵飛燕文皿》《スリップウェア グリフィン図大皿》《ガレナ釉彫絵蛙図大皿》《白化粧鉄絵駟兔文大鉢》などで、現実の動物から着想を得たもの、伝統的図柄に学んだものともさまざまだが、動物たちは生を得たようにいきいきとしたリーチ特有のいきいきの姿となり、おおらかで柔らかな素地に、のびのびと自由に跳躍している。これらのうつつわに跳ねる動物たちの表現を通し、絵とカタチ、一瞬の命の輝きと普遍の美、西洋と東洋というリーチが目指した調和の世界を鑑賞して欲しい。